

《読書ノート》

植民地主義と近代性の関係を再考する

：フレデリック・クーパーの論考から

水 谷 智

は じ め に

この論文は、発足して間もない共同研究「ヨーロッパと日本における植民地主義と近代性：比較研究のパラダイム構築に向けて」の方向性を模索する試みの一環である¹⁾。欧米の植民地主義研究は、特に1980年代以降、支配の政治・経済的構造の解明から、言語表象や心性など多様な文化的問題を包含する「近代性」にまつわる問題系へと焦点をシフトさせていった。近代の西洋知識人が前提としてきた知の生産と蓄積のあり方そのものが「植民地主義」的であったという学問の厳しい自己批判のもと、植民地社会とその歴史への「科学的」なアプローチ（人類学や歴史学に代表される）そのものを問い直す一種の知的革命としてこのシフトは位置付けられる。一方、こうした近代性批判は、日本という東アジアの「帝国」を十分に論ずることなく理論／体系化されてきた。政治制度や経済の近代化のために様々な思想を欧米から輸入しつつも、イデオロギー的には「近代の超克」によって西洋中心主義的な世界史観をも克服しようとした日本——その近代との関係は、「植民地近代性」に関する諸議論になかにどう位置づけられるべきなのだろうか。西洋中心主義と「近代」への批判が、自国の帝国支配を肯定するレトリックへと転換された日本について世界史的な観点から考えることは、植民地主義と近代性の双方を同時に考察するための有意義な主題へと発展させうる。そのためには、言語の壁を共同研究によって乗り越えながら厳密な比較研究を行う必要があるが、まず基本的なコンセプトや学説史の検討が不可欠であることは言を待たない。そこで本研究会では、英語圏の植民地主義研究の第一人者の一人であるニューヨーク大学教授・フレデリック・クーパーの植民地主義論を取り上げ、アジア、アフリカ、オセアニア、アメリカの様々な植民地社会をフィールドとする研究者が一同に会し二度にわたり議論を行った²⁾。本論文は、筆者によるクーパーの近著の読解と研究会メンバーとのディスカッションの成果を簡潔にまとめたものである³⁾。

1. 『問題の植民地主義』

「ポストコロニアリズム」という言葉が日本のアカデミズムを賑わすようになって久しい。戸邊秀明が論じているように、「敗戦から戦後へ」という歴史認識が形成される過程で植民地主義の問題が忘却されていった日本にポストコロニアリズムの精神と知的方法を導入する意義は極めて大きい⁴⁾。しかしその前に、ポストコロニアリズムが批判し、超越（「ポストー」）しようとする「植民地主義」とはそもそも何なのだろうか。西ヨーロッパで成熟していった合理主義や文化規範に潜む「西洋中心主義」を暴き出し、自己中心的な「普遍性」にかわって真の多様性や他者性を見出そうとするポストコロニアル思想は、その形而上学的深遠さと射程の広大さをもって人文学に新境地を拓いてきた。その一方で、時に極端なまでの抽象化によって「植民地主義」の意味するものが曖昧になり、その史的・空間的特殊性を捉えることが逆に難しくなってしまったという面も否定できない。（特に植民地社会の実証的な研究を行っている者にとって、近年の「コロニアル」という概念の広汎な使用には戸惑いを覚えさせるものがある。）ポストコロニアリズムの「本場」ともいえる英語圏の言説空間⁵⁾では、「植民地主義とは何か」を含め、分野の方向性や存在理由そのものに関して1980年代からいくつもの論争があり、今日まで続いている。本論文でとりあげるフレデリック・クーパーも、ポストコロニアリズムの知的運動に呼応しつつ、「植民地主義」や「近代性」について根本的な問いかけを続けてきた論者の一人である。特に2005年に出版された『問題の植民地主義：理論，知，歴史』（カリフォルニア大学出版局）⁶⁾は、自身の実証研究を踏まえつつも理論的問題にその焦点を合わせており、我々の研究会のように植民地主義の理論・方法論的基盤に関心にある者には一読に値する書である。

ここで『問題の植民地主義』（以下、『問題』と標記）におけるクーパーの主張を取って短く要約してみよう：

植民地主義は「近代性」そのものではない。近代性の伝播／受容も含めた、しかしそれだけに還元されえない、複雑でしばし矛盾する支配の諸形態と多様な抵抗の軌跡を構造上内包するのが植民地主義の歴史的実体である。近代学問知の西洋中心主義を克服するためには歴史学的理性の批判は確かに不可欠である。しかし植民地化の歴史的状況の厳密な理解なくしては、植民地責任論、現在も継続する植民地主義やそれへの抵抗、脱植民地化以降にアジア・アフリカ社会が直面する諸問題、と取り組むことはできない。

無論これに類似する批判はこれまで幾つもでてきた。しかし、そうした批判やそれに続く反批判は、時に感情的であったり、「理論 vs. 実証」や「ポストモダニズム vs. マルクス主義」といった単純化された二項対立を再生産するだけで、必ずしも建設的な議論に発展

してこなかった⁷⁾。クーパーの批判はこうした不毛な二項対立を超える可能性を秘めていると筆者は考えている。それは、彼がポストコロニアル思想を大胆に歴史学に導入した「サバルタン研究」グループ（下記「3.」参照）と対話するなどして新しい潮流を摂取し、歴史家でありながらも偏狭な実証主義に陥ることなく、重厚な学説史的知識の蓄積に依拠しつつ自らの研究方向性を模索しつづけてきたからである⁸⁾。植民地主義と近代性の二つのテーマを比較の視点から掘り下げるといふ共同研究の始まったばかりの試みに、『問題』が提示する現実認識と学説史的知見は何らかの示唆を与えてくれるはずである。

2. 近代化と近代性

クーパーが『問題』で一貫して主張しているのは、「近代性」という概念の濫用を避けるべきということであるが、近代を特に植民地との関係においてどう評価するかに関しては、日本植民地主義研究の文脈でも近年議論が高まりつつある。下に触れるように、例えば植民地朝鮮の研究では、戦後から今日に至るまで、日本、韓国、欧米の研究者のあいだで近代と植民地主義の関係について様々な議論が展開されてきた。日本支配は朝鮮半島の「近代」にいかなる影響を及ぼしたのだろうか。植民地主義がもたらした近代化をどう「評価」（肯定／否定）すればいいのだろうか。『問題』を読んでみて分かるのは、東アジアとクーパーが主に論じるアフリカでは植民地と近代をめぐる状況が幾分異なっているということである。クーパーによると、アフリカでは、脱植民地期にあたる1940年代後半からの戦後期に、帝国支配という負の遺産を植民地社会の「近代化」（貧困の解消や権利の平等な配当を含む）へと転換する試みが学問、実践の両レベルで試みられた。もちろん、こうした試みはさまざまな思惑が絡みあった、矛盾を抱えたものではあったが、そこにはフランスやイギリスによる自己中心的な「開発」の企てがアフリカ人自らの手によって帝国側に制御不能な権利要求へと変換されていくという歴史のダイナミズムが存在したことも確かであった（下記「4.」参照）。

第二次大戦後も否応なく植民地に向きあわざるをえなかったフランスやイギリスと違い、日本は「敗戦」によって「帝国」を忘却していく。一方、旧被支配側の韓国では、こうした歴史的切断が「植民地主義と近代化」という主題自体のタブー化の一因ともなった。洪宗郁による綿密な歴史研究が明らかにしているように、朝鮮の社会主義知識人の中には、支配をめぐる厳しい現実認識のもと、1930年代に日本の左派と連携し、帝国の包摂原理を抵抗的に利用しながら朝鮮半島の「近代化」と朝鮮人の地位向上を模索した人々も存在した。しかし帝国日本の消滅および南北分断体制下の「反共」意識の中、民族独立運動のみが評価される一方で、こうした左派知識人による近代化の試みは「転向」として一括さ

れ、省みられることは少なかった⁹⁾。このような東アジアの戦後史は、大戦後も植民地が存続し、帝国の枠内でアフリカ人による地位向上要求が行われ続けたフランス現代史などとは幾分隔たりがある。日本統治下の厳しい弾圧や過酷な搾取の糾弾と軍政下のナショナリズムとがあいまって、独立後は長いあいだ、朝鮮半島を一方的に搾取し、近代化を遅らせたものとして植民地主義を理解する「収奪論」が支配的であった。だが近年では、板垣竜太や三ツ井崇も示しているように、植民地主義こそが韓国社会を近代化し、経済発展のインフラを作ったのだという「恩恵論」も出現し、論争を巻き起こしている¹⁰⁾。単純な「収奪論」では例えば「転向者」とされた朝鮮社会主義者による試み等は捉えきれない一方、「恩恵論」の方も近年日本で「嫌韓流」と呼ばれるレイシズムの知的源泉となっているなど、双方とも課題を抱えている¹¹⁾。

欧米でも東アジアでも、こうした議論は「近代化」(modernization)をめぐって展開しているが、核になるのは帝国支配者の持ち込む産業資本が植民地の歴史発展にどのような役割を果たしたかという問題である。そこで影響が大きかったのがマルクス主義者の唯物史観である。少なくとも英語圏では、左派知識人による唯物史観への内在批判が植民地主義研究における「近代化」から「近代性」(modernity)への焦点の移行の最も大きな要因の一つであるとみて間違いない。資本主義を社会主義への歴史的発展のためのある種の「必要悪」と見なす安直な唯物史観においては、アジア・アフリカ諸国への資本主義の浸透が歴史的必然と認識され、それによって植民地支配さえも正当化される危険性がある。80年代以降登場した多くのポストコロニアル論者にとってこうした段階論は西欧中心主義的な世界史観と結託するものに他ならず到底許容できるものではない¹²⁾。「普遍的」な歴史発展のモデルをもって植民地社会の経済を論じること自体が一つのコロニアルな欲望として批判されるのである。少なくとも英語圏では、「植民地近代性」という新しい概念はこうした近代化論への方法論的批判をその射程に含むものである。知識人自身が無批判に内在化してしまった「モダン」な思考をまず相対化し、西洋中心的な歴史学的理性を克服せずして真にラディカルな植民地主義批判はありえない、とされるのである。

植民地主義への批判的アプローチが既存のアカデミズムに対する根本的な異議申し立てを伴うものへと変容したことを考えると、近年のポストコロニアリズムにおいてポスト構造主義による合理主義への知的抵抗が特権的重要性を獲得したとしても何ら不思議ではない。また、「言説」、「テキスト」、「無意識」などが分析の主要領域として設定されるなか、「読み」の専門家として文学研究者がこの思想運動を引っ張ったのも当然の成り行きといえる。ポストコロニアル批評の「聖三位一体」と称されるエドワード＝サイード、ガヤトリ＝スピバック、ホミ＝バーバの各論者は、いずれも比較文学を専門領域とし、ミシェル＝フーコーやジャック＝デリダのポスト構造主義を大胆に植民地主義権力の分析に適用し

てきたという共通点を持っている。彼らのポストコロニアル思想は日本にも早くから紹介され、特に英文学研究や文学理論などの分野で大きな影響力をもってきた¹³⁾。また、比較文学者や批評家の中には、単なる外来思想の紹介の枠を超えて、日本の「近代」の語りに潜む植民地主義的欲望を炙り出し読み破るためにポストコロニアリズムを導入する人々も出始めている¹⁴⁾。

英語圏の近代性理性批判に特徴的なのは、日本と違ってそれが比較文学や文化研究だけでなく歴史学にも早くから体系的に導入されてきたことであろう。インド出身のラナジット＝グーハが中心となって1980年代に結成された「サバルタン研究」グループによる南アジア史研究は、単に新たな実証研究領域を開拓するにとどまらず、西欧中心的な世界史観に還元されえないような新たな歴史叙述を志向するものである。ここでは、アントニオ＝グラムシのポスト・マルクス主義的な「ヘゲモニー」の概念とあわせて、ミシェル＝フーコーの規律権力論やジャック＝デリダのテキスト論が特に重要な意味を持つ。植民地社会は、西洋の近代理性がその自民族中心的な普遍性を他者に押しつけつつも同時に他者の存在によってその純粋性が脅かされるような複雑な言説の磁場を形成するものと定義される。「サバルタン研究」とは単なる歴史学ではなく、むしろ既存の歴史学的理性を含む近代合理性の精神や被支配者によるその内在化プロセスを批判し、理性や規範の彼岸にあってそれらを脱構築するような抑圧された「サバルタン」(従属者)の声なき声を回復する知的試みと位置づけることができるだろう。

3. 「植民地近代性」

『問題』における植民地近代性に関する諸議論のなかで、クーパーが特に言及するのが「サバルタン研究」に他ならない¹⁵⁾。彼は、1994年にアメリカン・ヒストリカル・レビュー誌に掲載された論文「争いと連結：植民地アフリカ史を再考する」で、すでにサバルタン研究を比較研究の視点から大きく取り上げている。この論文において、クーパーは植民地社会の分析に多様な可能性を開くものとしてサバルタン研究を評価しつつ、それがアフリカ史研究に持ちうる意味を様々な実証研究を参照しながら論じている¹⁶⁾。一方、現代思想を大胆に応用するサバルタン研究の普遍的な重要性を認めつつも、彼が南アジアとアフリカの植民地化過程の違いを強調している点も見逃すべきではないだろう。西ヨーロッパから近代がもたらされ、受容／抵抗される過程は、インド亜大陸とアフリカでは歴史的に異なっていた。クーパーは、主に南アジアの植民地経験をもとに理論化されていった「植民地近代性」の概念を、そのままアフリカ社会に「応用」するよりも、その可能性と限界を個別の歴史現象に照らし合わせながら冷静に検証する道を選んでいる。ここで既

に、約 10 年後に出版されることになる『問題』が展開する諸批判の芽も散見されるが、この時点ではインド史家とアフリカ史家の間に存在して当然の問題意識や課題のギャップにその起源を求めた方が妥当であろう。植民地近代性論への批判が先鋭且つ包括的になされるのは『問題』においてである。この本が植民地アフリカ史だけでなく世界史的な観点から植民地主義研究のあり方を再考するものであることを考慮すると、それが持つ意味を考えることは東アジアの植民地主義を検証する上でも有意義なはずである。

クーパーの批判がここ 10 年間のうちに先鋭化する原因の一つとしては、サバルタン研究自体が植民地社会の歴史分析よりもむしろ近代性批判の方に次第に接近していったことが挙げられるだろう。例えば、クーパーが論じるディベッシュ＝チャクラバティーの近著『ヨーロッパを地方化する：ポストコロニアル思想と歴史的差異』（2000 年）¹⁷⁾ が主題化するのも、具体的な植民地インドの歴史よりもむしろ世界史叙述の「主体」としての西ヨーロッパと、それが脱構築（「地方化」）される可能性である。その中でチャクラバティーは、例えば、いかにして 19 世紀にベンガル・エリートたちがイギリス植民地主義がもたらす近代性の諸相（科学／テクノロジー、法律、社会改良、等）と取り組みながらも、普遍性に還元されないような進歩主義的なヒンドゥー主義を提示しえたかを示そうとする。近代性を脱構築するような近代性（つまり、近代であってそうでないもの）を導き出すことは、近代性の非西洋社会への伝播を担う世界史的主体としてのヨーロッパの普遍性を脱神話化していくことにつながる。

こうした歴史学的理性批判を、クーパーは幾つかの角度から検証している。西ヨーロッパを「歴史主体」と定義することが西洋ブルジョワ社会内部の階級的矛盾や緊張を隠蔽してしまう危険性¹⁸⁾、当時イギリス人にもインド人にも使われていなかった「近代性」という概念を現在中心主義的（presentist）に分析概念として歴史分析に使用してしまっている問題¹⁹⁾ などが指摘される。しかし特に重要なのは次の点であろう。すなわち、植民地近代性の概念によって植民地主義が近代性と同一視され、反植民地主義と抽象的な「近代の超克」が次第にほぼ同義的になるにつれ、抵抗の具体性と多様性が見落とされてる、と。『問題』の序章でクーパーはこう述べている：

「非歴史的歴史は非政治的政治を促す危険性がある。〈ポスト啓蒙主義的合理性〉、〈理性の狡猾さ〉、もしくは〈近代性の挿入〉があたかも植民地的状況の政治的可能性を形づくったように書くことは、主体無き抽象化に過剰な重要性を与えることであり、特定の植民地的状況の可能性や強制に直面したときどう人々が行動したかについてほとんど何も示唆しない。」²⁰⁾

ここで使われている「植民地的状況」とは、フランスの人類学者ジョルジュ・バランディエが1951年に発表した論文からとった概念である²¹⁾。思想や批評の領域でポストコロニアリズムの近代性批判が果たしてきた意義は限りなく大きい。しかし、「植民地的状況」の厳密な理解やそれへの現実的なコミットメントから離れ、近代性批判を第一命題とすることから派生する問題も無視できない。特に、近代性に過剰に固執することによって、「植民地不在」の植民地主義批判という矛盾、さらには、植民地が西洋中心主義批判の単なる手段・道具へと還元されてしまうという転倒が起こる危険性がある²²⁾。近代的な知的生産における研究者の位置を問題にする「ポスト近代」の観点は確かに不可欠ではある。だが、近代性がその諸要素を植民地的へと浸透させていくことはあっても、植民地主義は近代性そのものではありえないのであり、植民地主義に関する研究者の倫理性は近代学問知に対して批判的なスタンスをとるだけでは保証されえない。近代性の問題を含めた植民地的状況を明らかにすることにこそ「ポストコロニアル」な政治介入の可能性があるのであり、研究者の倫理的責任もそこにある、というのがクーパーの主張である²³⁾。クーパーがバランディエを再評価するのは、後者の50年代の実証研究が現状認識にもとづいた実践と結びついていたからに他ならない：

「1950年代初期の学問を回顧したとき、その政治的アンガージュマン〔engagement〕を、そして、自分たちの発言が物事を変えていくいくのだという知識人の感覚を、誰も見逃すことはできない。彼らは、言説をつくりかえ、ある種の介入を批判し、自分たちが抑圧や無関心と見なすものを明確にし、介入がもたらす思いもよらない結果を指摘し、そして何よりも、世界をまたがる権力の秩序を再考してつくりかえる必要性を主張しえた。そうした学識は、——それが近代化理論であろうと、バランディエによる植民地的状況の概念であろうと——、行動への呼びかけであり、またそれは実世界へのその影響と効果に基づいて検証されたり反対されたりするよう条件づけられていた。現在、植民地主義がポスト啓蒙主義的合理性の悪魔の双子と位置づけられてしまったあとでは、誰も、次に何をなすべきかよくわからないのである。」²⁴⁾

4. 帝国支配の構造的矛盾・限界と様々な抵抗の軌跡

植民地近代性の概念の限界を指摘しつつクーパーが主張するのが、「帝国国家」の世界史における重要性であるが、この点は「国家、帝国、政治的想像」と題された第6章で主に論じられている。彼はいう：

「この章〔第6章〕が指摘した一番重要な点は最もシンプルなことである：すわなち、過去のごく最近の瞬間に至るまでの世界史における諸帝国の根底的な重要さ、である。帝国のように考えること、同化と差異化を共存させること、遠距離的拡張の問題に直面し、大きく且つ多様な諸集団の管理の限界を認識すること、がそれぞれ所与の政治体制にとって何を意味したのかを我々は真剣に受け止める必要がある。帝国のように考えることは国民国家のように考えることと同じではなかった。」²⁵⁾

「帝国」という言葉が氾濫している今日において、帝国空間を考える重要性の指摘自体は英語圏ではすでにありふれたものとなっているといえる²⁶⁾。だがクーパーの独自性は、帝国の普遍的な力よりもむしろその構造的矛盾や内的な緊張関係に取って着目しているところにある。帝国支配における植民地近代性の遍在性を強調しすぎることによって看過されてしまうのは、近代帝国国家がその支配の性質上抱え込まざるをえなかった構造的限界である。例えば、諸帝国は植民地の現地エリートに依存することによって初めて支配を成立させることができたが、そのことは予期せぬ権利要求にもつながっていった。また、広大な領域を統一することは、中心（宗主国）を経由しないような、様々な連帯を許容してしまう可能性に道を開いた。そして何より、差異化しつつ同化するという根本的に矛盾する植民地化のプロセスは、支配者と被支配者の間に多様な緊張関係を生み出し、「近代 vs. 反近代」、「植民地主義 vs. ナショナリズム」といった二項対立的な図式には必ずしも還元できない複雑な抵抗の可能性をもたらしたのである。

『問題』の第7章（「フランス領アフリカにおける労働、政治、帝国の終焉」）やその他の著作²⁷⁾でクーパーが紹介している植民地アフリカの労働問題の事例は、同化と差異化の共存が引き起こす種々の矛盾や、近代の「普遍性」が被支配者にたいして持ちうる複雑な可能性／限界を提示している。植民地確保の重要性が再認識された戦後期において、フランスは初めて本格的にアフリカ領の「開発」に乗り出すが、この試みは予期せぬ方向に推移してゆくことになる：国際労働運動などと連動するアフリカ人労働者の手によって、「開発」が政治的権利や経済的対等性への「普遍的」要求へとつながっていったのである。帝国の周縁部からの平等を求めるこうした運動は、20世紀の「福祉国家」フランスにとって独立運動に勝るとも劣らない経済的脅威として認識された。もちろん、こうした「近代」の希求は「アフリカ人の固有性」に基づく民族主義的要求とも微妙な関係にあり、最終的にはアフリカ人によっても独立の課題が優先されるようになっていく。しかし戦後の脱植民地期にみられたこうした緊張関係は、言語や表象に焦点が置かれる近年のポストコロニアリズムの議論ではあまりみられなくなった経済格差や政治的権利といった重要な諸課題を提示していたとクーパーは主張している。帝国空間における地域を越えた労働運

動がもつ「普遍性」は中心（ヨーロッパ）に深い衝撃を与え、帝国内の人種化された生活格差の問題を提起していた。逆に独立後のポスト植民地世界では、こうした「普遍性」と「固有性」のあいだの緊張関係が失われ、貧困や格差の問題が、「第三世界」各国の「国内問題」と理解され、「専門家」（国際機関や NGO）を除いてヨーロッパの人々のリアルな関心の外に置かれるようになってしまったのである²⁸⁾。

クーパーにとって、帝国支配の歴史的限界について考えることは単に近代性や資本主義の植民地社会への浸透の不均等さを指摘するにとどまるものではない。それは、帝国権力の不完全さや矛盾が被支配者による「抵抗」に持ちうる意味合いを再考するという倫理的課題と直結しているのである。植民地主義と近代性を同義的に扱い、「文明」、「進化」、「デモクラシー」などの近代的諸概念を言語表象のレベルで脱構築することは、それらが帝国空間の中で被支配者によって作り変えられる可能性にあらかじめ蓋をしてしまうことにつながりかねない。帝国への脅威を構成したのは、ナショナリスト独立運動だけでもなければ、まして近代理性の彼岸にあるアジア・アフリカの文化的「他者性」だけでもなかった。近代の諸理念と被支配者の抵抗の関係性をめぐって、クーパーの植民地主義論が植民地近代性論と違っているのは、後者が理念の形而上学的意味を主題化するのに対し、前者が理念の歴史性と所与の文脈における使用（曲解や奪用）に着目していることである。被支配者による歴史実践へのそうした眼差しは、ポストコロニアル論者によって偏愛されてきたフランツ・ファノンの「精神分析」よりも、トゥサン・ルヴェルチュール、レオポール＝セダール＝サンゴール、エメ＝セゼールらによる「フランス革命の要の諸要求をハイチに持ち込み、それらをその過程で変容させ」たり、「フランス市民権を帝国に意味あるものにし、それを社会的平等や文化の承認への要求を行うための土台とし、フランス帝国を超えて世界文明へのアフリカの貢献への普遍的主張」を行ったりする政治的实践の方をクーパーがむしろ重要視していることにも見て取ることができる²⁹⁾。

5. お わ り に

クーパーによる植民地近代の再考は、ヨーロッパだけでなく日本の東アジア支配をも視野に入れて近代を論じようとする我々の共同研究にどういった意味を持ちうるだろうか。当然のことながら、東アジアの「ポストコロニアル」を取り巻く状況は、クーパーが問題にする英語圏の人文アカデミズムのそれとは大きく異なっており、彼の批判的介入をそのまま日本や韓国の言説空間に「導入」しようとするのはあまりにも安直であるといわねばならないだろう。新しい理論・方法の無批判な応用は、各々の植民地の文脈の歴史・空間的特殊性を重視する彼自身の方法論的スタンスとも相容れないはずである。研究会で戸邊

が明らかにしているように、日本史学の通史叙述における「植民地」の不在は深刻であり³⁰⁾、その意味ではむしろチャクラバティーが実践しているような歴史学的理性批判が重要な意味を持ちうるだろう。一方、植民地主義研究には、クーパーの問題提起は議論と研究を賦活するのに役立つのではないだろうか。板垣によると、植民地近代性の概念が合衆国を經由してすでに植民地朝鮮の研究にも入り込み、一部、「植民地なき植民地主義研究」という批判も招いている³¹⁾。また、独立運動にも「近代の超克」にも還元されないような植民地主義と近代への多様な応答や抵抗のあり方に着目するクーパーのアプローチは、日本の植民地主義と東アジアの「帝国以後」を考えるに当たっても示唆的でありうるだろう。いずれにせよ、比較と対話の試みはまだ始まったばかりである。

注

- 1) この共同研究は、同志社大学人文科学研究所・第16期研究会・第9研究班「ヨーロッパと日本における植民地主義と近代性」を基盤に、2007年4月から活動を開始して現在に至る。尚、2007年度より、日本学術振興会から研究助成〔科学研究費基盤(C)〕を受けている。
- 2) 水谷智「植民地主義研究の歴史と今後の展開に関する考察」(同志社大学人文科学研究所・第16期研究会・第9研究班〔以下、「同大人文研16期9班」と略記〕・第2回研究会、2007年4月15日)；水谷智『『帝国国家』と近代世界：支配と抵抗の多様性と限界』(同大人文研16期9班・第5回研究会、2007年7月1日)
- 3) 研究会のメンバーと専門領域は以下の通りである。有満保江(オーストラリア：文学)、板垣竜太(植民地朝鮮：文化人類学)、戸邊秀明(帝国日本、沖縄：歴史学)、永渕康之(オランダ領東インド：文化人類学)、平野千果子(フランス植民地主義：歴史学)、洪宗郁(帝国日本：歴史学)、松久玲子(スペイン領ラテンアメリカ：教育学)、水谷智(イギリス領インド：歴史学)、三ツ井崇(植民地朝鮮：歴史学)、三原芳秋(大英帝国、植民地朝鮮：文学)。各氏の鋭い指摘、暖かい助言、論文および資料の提供なくして本論文の執筆はありえなかった。この場を借りて厚くお礼申し上げる。また、研究会運営のために同志社大学院生の北守慎介氏が協力してくれた。ここに感謝する。
- 4) 戸邊秀明「帝国後史への痛覚」、『年報・日本現代史』、第10号(2005年)、23-33頁
- 5) アメリカ合衆国、イギリス、オーストラリアの大学に在籍する研究者を中心に形成されている。
- 6) Frederick Cooper, *Colonialism in Question: Theory, Knowledge, History* (University of California Press, 2005)
- 7) 例えば、インドのマルクス主義批評家アイジャズ＝アーマドによるエドワード＝サイードのオリエンタリズム論に対する激しい批判は、その後サイードを擁護するロバート＝ヤング等のポストコロニアル論者を巻き込んで論争に発展したが、時に感情的な水掛け論になってしまった感が否めない。Aijaz Ahmad, *In Theory: Classes, Nations, Literatures* (Verso, 1992); Robert Young, *Postcolonialism: A Historical Introduction* (Blackwell, 2001)
- 8) アン・スローラーとの共著である『帝国の緊張』の序文「本国と植民地のあいだで：研究

課題再考」は、新たな植民地主義研究の方法を模索する論文であるが、実に様々な研究方法や時代、地域をカバーしており、共同執筆者のストーリーと並んでクーパーの学説史的知識の深さがうかがえる。Frederick Cooper & Ann Stoler, 'Between Metropole and Colony: Rethinking a Research Agenda' in (eds.) A. Stoler & F. Cooper, *Tensions of Empire: Colonial Cultures in a Bourgeois World* (University of California Press, 1997), pp. 1-56

- 9) 洪宗郁「1930年代における植民地朝鮮人の思想的模索：金明植の現実認識と『転向』を中心に」、『朝鮮史研究会論文集』、第42集（2004年）、159-181頁
- 10) 板垣竜太「〈植民地近代〉をめぐって：朝鮮史における現状と課題」、『歴史評論』、第654巻（2004年）、35-45頁；板垣竜太「植民地主義と近代：朝鮮史における論点整理」（同大人文研16期9班・第4回研究会、2007年7月1日）；高岡裕之・三ツ井崇「問題提起：東アジア植民地の『近代』を問うことの意義」、『歴史学研究』、第802巻（2005年）、1-5頁及び61頁（特に1-3頁で韓国での動向が論じられている）
- 11) 「嫌韓流」と近代化論については例えば以下を参照。板垣竜太「『マンガ嫌韓流』と人種主義——国民主義の構造」、『季刊・前夜』、第1期11号（2007年）、20-34頁（特に29-31頁）；松本武祝「植民地支配は朝鮮を豊かにしたか」、田中宏／板垣竜太編『日韓新たな始まりのための20章』（岩波書店、2007年）、30-37頁
- 12) 特に、カール＝マルクスのインド植民地支配の歴史解釈にたいするエドワード＝サイードの批判が大きな影響力を持つことになった。Edward Said, *Orientalism* (Vintage, 1979) を参照。
- 13) 例えば、山形和美編『差異と同一化：ポストコロニアル文学論』（研究社、1997年）を参照。
- 14) 例えば、以下のような著作が例として挙げられるだろう。サブタイトルの「近代文化批判」が印象的な姜尚中『オリエンタリズムの彼方へ』（岩波書店、1996年）；ホミ＝バーバの「擬態」の概念なども時折参照しながら日本の植民地主義を論じる、小森陽一『ポストコロニアル』（岩波書店、2001年）；三木清の歴史哲学やスピバックを「歴史的理性批判」の文脈で論じる、上村忠男『歴史的理性の批判のために』（岩波書店、2002年）；スピバックやファノンを論じた後、日本の植民地主義へも眼差しが向けられる、本橋哲哉『ポストコロニアリズム』（岩波書店、2005年）
- 15) 「サバルタン研究」は、「ケンブリッジ学派」の南アジア史研究を「西洋中心主義的」と批判しつつ、インド人エリートによる国民主義的歴史観をも同時に退けるところから出発した。現在、ディベッシュ＝チャクラバティー（シカゴ大学）やギャン＝プラカシュ（プリンストン大学）などの代表的なインド出身のサバルタン派研究者の多くはイギリスよりもむしろ合衆国、オーストラリア、カナダの大学に在籍している。ミシガン大学やニューヨーク大学で研究を行ってきたクーパーは彼らと活発な知的交流を交わしてきたようである。
- 16) Frederick Cooper, 'Conflict and Connection: Rethinking Colonial African History', *American Historical Review*, 99 (1994), pp. 1516-45 この論文は、植民地社会の比較研究を理論と実証の両面から推し進める我々の共同研究にとっても極めて示唆的でありうる。
- 17) Dipesh Chakrabarty, *Provincializing Europe: Postcolonial Thought and Historical Difference* (Princeton University Press, 2000)

- 18) 西ヨーロッパのブルジョワ社会の階級格差が、「本国」と「植民地」を包含する帝国空間においていかに「人種」的秩序と連関していったかについてはアン・ストラーによる次の論考を参照。Ann Stoler, *Race and the Education of Desire* (Duke University Press, 1995); Ann Stoler, *Carnal Knowledge and Imperial Power: Race and the Intimate in Colonial Rule* (California University Press, 2002)
- 19) クーパーは、『問題』の「第二部・問題の諸概念」(59-149 頁)において「アイデンティティ」、「グローバリゼーション」と並んで「近代性」という術語の植民地主義研究における濫用を検証／批判している。
- 20) Cooper (2005), p. 25
- 21) Georges Balandier, 'La situation coloniale' (1951) [G. Balandier, 'The Colonial Situation: A theoretical Approach', in (ed.) I. Wallerstein, *Social Change: The Colonial Situation* (John Wiley, 1966)]
- 22) こうした「矛盾」や「転倒」を考えるにあたっては、第二回研究会(同大人文研 16 期 9 班・2007 年 4 月 17 日)における永渕康之氏のコメントが大いに参考になった。
- 23) さらに最近では、近代歴史学的な「叙述」そのものが「倫理」の問題として浮上している。チャクラバティの議論にも通ずるような、歴史学的理性に「原-暴力」を見出す方向性は、ポストコロニアル批評の分野ではホミ・バーバ、ホロコースト研究ではエディス・ウィッショグロッドの各論考に典型的に表れている。Homi Bhabha, *The Location of Culture* (Routledge, 1994); Edith Wyschogrod, *An Ethics of Remembering* (Chicago University Press, 1998) ここでは詳しく論じるスペースはないが、こうした「ポスト歴史学」的立場に対しては、合衆国の批評家ドミニク・ラカプラが、不正な現実を変えんとする政治的実践の可能性を狭めかねず、また、大量虐殺の事実性を否定する「歴史修正主義」にも十分な反論ができないものとして批判的に論じている。(但し、ラカプラは記憶やトラウマの問題を軽視して「事実」を偏重する歴史実証主義も同様に批判している。) Dominick LaCapra, *Writing History, Writing Trauma* (The Johns Hopkins University Press, 2001) 日本では、歴史的理性と倫理の関係に関するこうした問題は、例えば、従軍慰安婦問題や歴史教科教科書問題への対応をめぐる起こった高橋哲哉と上村忠男の論争に見て取ることができる。上村忠男「歴史が書きかえられる時」、上村忠男・大貫隆他編『歴史を問う 5: 歴史が書きかえられる時』(岩波書店, 2001 年); 高橋哲哉「『歴史の他者』が『正義』を求めるとき: 『歴史のヘテロロジー』への問い」、高橋哲哉『証言のポリティクス』(未来社, 2004 年) 日本でのデリダ研究の第一人者として著名な高橋が、「正しい」歴史的解释の可能性と倫理的必要性を主張し、上村のポスト歴史学的立場(「歴史のヘテロロジー」)を批判している点は興味深い。こうした論争を詳しく検証することは、植民地責任論を再考するにあたって非常に重要と考えられる。
- 24) Cooper (2005), p. 54
- 25) Cooper (2005), p. 200
- 26) だがフランス植民地主義研究者の平野千果子は、現代フランス人には「帝国後」としての意識が著しく欠如しており、植民地との関わりを通史に刻み込んでいく作業が急務であると主張している。ポストモダン哲学発祥の地でありながらフランスには英語圏のようなポストコロニアリズムが存在しない。2005 年のパリ郊外暴動以後、ようやく植民地主義を

再考する動きがでてきているが、ここに至るまでの意識の欠如は際立っている。とりわけ、ナチズムおよびそれへのヴィシー政権下フランスの不名誉な加担のみをレイシズムや大量虐殺の課題としてとりあげ、帝国支配下の奴隷制や人種差別を無視するダブルスタンダードを平野は批判している。平野千果子「歴史を書くのはだれか」、『歴史評論』、第 677 号 (2006 年)、19-29 頁 フランスにおけるポストコロニアリズムの不在については、高橋哲哉による以下の論文も参考になる；高橋哲哉「『負の記憶』にどう取り組むか：戦後フランスとジャン＝フランソワ・フォルジュの歴史教育」、『比較史・比較歴史教育研究会編『帝国主義の時代と現在：東アジアの対話』(未来社、2002 年)、243-253 頁

- 27) Frederick Cooper, *Decolonization and African Society: the Labor Question in French and British Africa* (Cambridge University Press, 1996)
- 28) Cooper (1996), p. 469
- 29) Cooper (2005), p. 241
- 30) 戸邊秀明「ポストコロニアリズムのインパクトと可能性：日本植民地研究とのかかわりで」、『日本植民地主義研究』、第 15 号 (2003 年)、67-75 頁；戸邊秀明「日本植民地研究の現在：その広がりをつめるために」(同大人文研 16 期 9 班・第 3 回研究会、2007 年 6 月 31 日)
- 31) 特に、(eds.) Gi-Wook Shin & Michael Robinson, *Colonial Modernity in Korea* (Harvard University Asia Center, 1999) に対しては、「植民地なき植民地主義研究」という批判も出ていることを板垣が研究会で明らかにしている。板垣竜太「植民地主義と近代：朝鮮史における論点整理」(2007 年)